

---

# チョコレートショック

夢石スイナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チヨコレートショック

### 【Nコード】

N7465Q

### 【作者名】

夢石スйна

### 【あらすじ】

『バレンタインデー』気が重くなるその言葉。なぜなら私はチヨコレートが嫌いだからである。お題「チヨコレート」で書いた短編作品。

「もうすぐだね」

「え？ 何が？」

休み時間、私は友人の突然の言葉に疑問を抱いた。

「バレンタインデーだよ」

そうだった。もうそんな時期か。

「最悪……」

気が重くなり、私はぼつりと漏らした。『バレンタインデー』チョコレート』の式が成り立つからだ。なぜなら、私はチョコレートが大嫌いだからである。

それもただ嫌いというわけではない。体自体が拒否反応を示すのだ。吐き気やら体のかゆみやら……ようするに、チョコレートアレルギー。しかも食べなくてもその現象は現れる。

私が小学生の頃、親がいつものようにチョコレートを買ってきて私はそれを食べた。その時急に意識を失って救急車で運ばれた。なんとか一命はとりとめたが、それからというもの、チョコレートに近づくだけでアレルギー反応がでる。

そんな思い出があるから、もうバレンタインデーなんて勝手にやっってください。という気分。

だが、しばらくして思い出した。困った。私には好きな人が居るんだった！

好きな人にはやはりこの日にプレゼントをしたいものである。

「何……あげようかな」

「何ってチョコレートに決まってるじゃん」

「チョコじゃなきゃだめ？」

「もちろん」

私の暗い気分をよそに、友人は平然と答えた。

「しょうがない……適当なのを買おう」

「ダメダメ！ やっぱりチョコレートは手作りじゃないや、本命チョコだと思われないよ」

「マジで？」

包みにチョコレートが入っていると思うだけで、なんとなく嫌なのに、手作りなんてしてチョコに近づいたら、私の場合大変な事になる。

「チョコ作り頑張ってね！」

何も知らない友人は笑顔で私を応援した。

「う、うん……」

気が進まなかったが、結局私は友人に言われるがまま、手作りチョコを作る事にした。

まず近くのスーパーで材料を買ってくる。袋に入っているからとりあえずはなんともないが、見るだけでもう嫌な気分になってくる。私は気合をいれ、万全の対策をとることにした。

「よし！」

私の身を包んだのは白い防護服。放射能とかを処理する時に使われるような、特注のものである。この日のために用意した。これでチョコに汚染される心配はない。

十分換気に気をつけて、私は早速チョコの袋を開けた。

うん、なんともない。

最初は若干不安な気持ちにはなったが、安心して手作りチョコを作り始めた。

まずチョコレートを包丁で細かく刻んでそれから湯煎にかける。

本に書いてあるように生クリームを入れ、混ぜる。それからハートの型にそれを流し込み、私の初めての手作りチョコはすんなりと完成したのであった。

さて、後は箱に入れて包装するだけだが、箱にチョコが付くとやつかいなので袋に入れ洗淨した後、入れる作戦に出た。そこで私が取り出したのは……

「じゃーん。布団圧縮袋！」

なんとなくだけど、真空にしたかった。

私は小型の布団圧縮袋にチョコレートを入れ、空気を抜き、袋を洗った。

あとはチョコレートの付いたものを綺麗に片付け、私は防護服を脱いだ。

あらかじめ用意した青い箱にチョコレートの袋を入れ、リボンをつけて出来上がり。

後は明日渡すだけ。

「やったー！ なんとかやりとげた」

私は伸びをして、ベットに横になった。

明日が楽しみ。彼は喜んでくれるだろうか。

翌日、バレンタインデー当日である。

私が学校に着くと教室はなんとなくチョコの香りがする気がした。私は思わず吐きそうになった。一日この状態が続くとなるとかなりやっかいである。

「おはよう。今日の準備はオーケー？」

「う、うん」

私は手で口を押さえて答えた。

「大丈夫？ 顔色悪いみたいだけど」

「なんとかね」

授業が終わり、昼休み。私は人気のない所に彼を呼び出した。もちろんチョコを渡すため。

「中村くん、これ」

おずおずと私は彼にチョコの入った青い箱を渡した。

「俺に？」

「うん」

「ありがとう！」

中村くんは箱を受け取り、満面の笑顔を見せてくれた。素敵。

私はそれからもしもじとして、思い切って今の思いを伝える事にした。

「それで、その……私、中村くんのが好きです！」

告白した。心臓の鼓動が高鳴る。

しばらくして、照れくさそうに中村くんは言った。

「……実は俺も船瀬のことなんとなく気になってたんだ」

告白は大成功であった。

私はよかった。と胸をなでおろした。

「開けてみてもいい？」

「うん」

ノリですんなり返事をしてしまったが、やばい！アレルギーが出る。

急いで私は中村くんを止めた。

「や、やっぱ家に帰ってからで！」

私の慌てふためく姿に、中村くんは少し不思議そうな顔をしたが、わかったよ。と笑った。

こうして私たちは付き合うことになった。

バレンタインデー……悪くないかも。

そしてある三月の日のこと。

「友里ちゃん」

「なに？ 久雄くん」

私たちが付き合って約一ヶ月である。今では下の名前で呼び合っている。

「今日って何の日かわかる？」

「私たちが付き合い始めて一ヶ月だね」

「そうだよ。それで、これ」

と、久雄くんは包みを取り出した。なんかちよつと嫌な予感がする。

「バレンタインデーのお返し。友里ちゃん甘いもの好きだと思って包みを渡された時思った。これは十中八九チョコレートではないかと。」

「あ、ありがとう」

引きつった笑みを浮かべながら私は礼を言った。

「開けてみてよ」

「え？ 今ここで？」

「うん」

久雄くんの笑顔に押され、私はしぶしぶと包みを開けることにした。

開けるとむわっとチョコレートの匂いが鼻を付く。

き、気持ち悪い。

「どうしたの？ 顔色悪いよ」

「だ、大丈夫だよ」

涙目になりながら私は答えた。

「そうかな？ 調子悪い時は糖分取った方がいいよ」

久雄くんは包みからチョコレートをつまんだ。私の口元へチョコが迫ってくる。

「ほら、あーんして」

ああ、神様。私はもうすぐ逝きます。今までみんなありがとうね。閉じていた口を開くとそこにチョコレートが放り込まれた。

一気に視界が真っ暗になった。

「ゆ、友里ちゃん！！」

久雄くんの声が聞こえたと思った瞬間。そこで私の意識は途絶えたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7465q/>

---

チョコレートショック

2011年2月8日02時25分発行